

研究雑話 (26)

フランスの障害者教育・福祉事情(十) 四人に一人が落第生、フランスの苦悩の一断面

藤井力夫

前回はフランスの養護学校における統合教育の実際についてお話ししました。小学校の特殊学級が廃止されたのを機会に養護学校の教室を付設し、この教室をベースキャンプのように利用して統合教育を進めているクラスBの様子をお話ししました。他のクラスは学校五日制の休みにあたる水曜日の午前中を有効に活用して実施。前号の表で概括。土曜日でなく水曜日を休みにする利点はなによりも地域の社会教育組織を利用し易いこと。統合教育の推進には好都合。水曜日の午前中、クラスAは自転車での遠乗りを活かして隣村の小学校と統合教育。クラスCは隣の特設中等部 (SE S) とサッカーなどのスポーツを実施。さらには寄宿舎では町のスポーツクラブや絵の教室等に積極的に通うことを援助、等。

今回は、フランスにおける普通の小学校の様子とくに日本では考えられない落第生の存在とこれに対する動向についてお話ししたいと思います。

表Aは養護学校が教室を付設している小学校の学級編成と落第生の一覧。校長先生に書き出してもらったもの。下段には支援の適応学級への通級児童数を明記。表Bは適応学級への通級の週時程。この学校は団地の一角にあり、サラリーマン、労働者層の子弟が通う地方都市の典型的な小学校。児童数は一八六名。同じ敷地にもう一つの小学校。同じ建物 (鉄筋三階建て) の真ん中を防火シャッターで区切って同規模の小学校がある。校長が子

どもの顔を覚えらるる範囲が最大規模。それ以上は小学校としてふさわしくないという。しかも一学級の児童数が二、三名程度。なんと人間的な条件か。ところが落第生が四八名、全体の二五・八%。四人に一人が落第生。一年遅れが四五名、二年遅れ二名、三年遅れ一名。大半は一年生の時の落第。この年度も七名が落第。一年生の内の一五・五%。多くはなく、フランスの小学校の平均的な数字。日本では理解できないこと。一九九〇年以降学年毎の落第でなく、三年単位のまとまりで実施するように変更 (たとえば、就学前年を入れて小学二年まで)。しかし基本は変わらない。ほとんどはフランス語の読み方 (レクチュール) で落第。九月始業で「クリスマスまでには判読でき、復活祭までにはすらすら読めるように」。少し象徴的ですがこうした到達度評価を堅持しているからです。移民の子弟が多いことも事実。が、小学校に占める移民の子弟の割合は当時で一〇・四%。就学前までの読み聞かせ等が大きく影響しているようです。どのように対応してきたか。固定的特殊学級ではなく遅れ克服のための「適応学級」を用意すること。あわせて彼らに対する心理教育援助専門教師集団 (GAPP)、心理学、心理教育学、心理運動学の三人の専門家による支援集団を三校に一チーム配

表A. ある小学校における落第生の分布
L'Ecole Primaire, Jean ROSTAND, BEAUVAIS, 1985-86

学年	1年 (CP)		2年 (CE1)				3年 (CE2)				4年 (CM1)		5年 (CM2)					
	A男	B女	C男	D女	E男	F女	G男	H女	I男	J女	K男	L女						
通常	10	9	11	8	13	8	2	3	5	6	10	7	9	8	11	6	8	5
1年遅れ	2	2	1	2	0	5	1	1	2	1	3	2	3	2	5	0	6	7
2年遅れ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
3年遅れ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	12	11	12	10	13	13	3	5	8	7	12	9	12	10	16	7	14	12
適応学級通級児	3	0	1	4	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

表B. 適応学級時間割
Classe d'Adaptation (R.P.P. Mme RIDEL) 1985-86

	8:30	9:15	10:00	10:20	11:30	13:30	14:15	3:00	3:20	4:30
月	CE	CP(A)		CE・CP		CP(B)	*		*	
火	CE	*		CE・CP		*	CP(A)		CP(A)	
木	CE	CP(A)		CE・CP		CP(B)	*			
金	*	*		*			CP(A)		心理運動	
土	CE	CE・CP		*						

(*印時、隣接のもう一つの小学校の児童を指導)

置すること (ボーベ市には四ヶ所、十三人の専門教師)。この両面から対応してきた。この学校の場合は前者、適応学級。心理教育学の資格をもつ女教師が担当。一年生のクラスAの四人についていえば週四回、一日一時間程度の学習支援。三、四人の児童に対する読み書き指導が中心。「音節法」など最近の言語心理学の成果を取り入れた密度の濃い指導。落第生を前にして、子どもにあった学校をどうつくるか。これが数十年来のフランスの苦悩の一断面であった。

(北海道教育大学教授)